

5) 食道裂孔ヘルニアと鑑別が困難であった成人型 Bochdalek 孔ヘルニアの1例

寺島 哲郎・島村 公年
西村 淳・鈴木 力
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

今回我々は、食道裂孔ヘルニアと鑑別が困難であった成人型 Bochdalek ヘルニアの1症例を経験したので、報告する。症例67才男性。'97年11月突然の呼吸困難を自覚し近医受診。胸部X線検査で左横隔膜の著名な挙上、上部消化管造影にて、up side down stomach 様所見が認められた。傍食道型食道裂孔ヘルニアの診断にて開腹術施行。手術所見で左横隔膜外側後方に 75 mm×53 mm の欠損が認められ、同部より左胸腔内に胃の殆ど、大網の一部、脾・結腸脾弯曲部が脱出しており、ヘルニア嚢は認められず、この時点で、成人型 Bochdalek ヘルニアの診断となった。手術はヘルニア門直接縫合閉鎖術を施行した。外科的には術後経過良好で、健存中である。

6) VCS (血管吻合用クリップ) を用いて血行再建を併施した膵頭十二指腸切除術の2例

高木健太郎・青野 高志
齊藤 有子・本間 英之
武藤 一朗・長谷川正樹
小山 高宣 (県立中央病院外科)

症例1：73才，女性，膵頭部癌，術前の血管造影にて門脈浸潤を認め、膵頭十二指腸切除術に門脈合併切除再建を併施した。門脈血行再建は Proline 5-0 の4点支持に VCS を併用した。吻合時間は20分であった。

症例2：56才，男性，腫瘤形成性慢性膵炎，術前の血管造影にて脾静脈本幹の閉塞と側副血行路としての胃大網静脈の拡張を認めた。全胃幽門輪温存膵頭十二指腸切除術に右胃大網静脈と胃結腸静脈幹との吻合を併施した。血管吻合は Proline 6-0 に VCS を併用した。吻合時間は12分であった。

結語：VCS を用いた血管吻合は短時間に吻合ができ、狭窄も少ないすぐれた手技であると考えられた。

7) 膵管内乳頭腺腫の1切除例

長倉 成憲・大竹 雅広
佐藤 政・清水 武昭 (信楽園病院外科)
柳沢 善計・村山 久夫 (同 内科)

術前の画像診断法では結節を描出しえず診断に苦慮した膵管内乳頭腫瘍の1例を報告する。(症例)75歳，女性。貧血の精査目的で行った腹部 CT で膵管拡張が偶然見つかった。(検査成績)腫瘍マーカーは正常。US, CT, MR, MRCP, EUS などでは膵頭部から体部にかけての膵管拡張を認めたが、膵管内には結節性病変を認めなかった。(手術)術中の膵管鏡検査で、膵頭部膵管内に数ミリ大の乳頭状病変を認めた。手術は十二指腸温存膵頭亜全摘術を施行。(病理組織検査)膵管内乳頭腺腫。(まとめ)1.膵管内乳頭腺腫には、画像診断で膵管内腔が平滑で壁肥厚や壁に結節を認めない形のものが存在する。2.癌合併の無い膵管内乳頭腫瘍には機能温存を考えた術式を選択すべきである。

8) 二峰性アルブミン血症 (bisalbuminemia) を伴う膵炎7例の検討

岡村 直孝・野上 仁
鈴木 晋・草間 昭夫
若桑 隆二・田島 健三 (長岡赤十字病院 外科)
和田 寛治
小林 幸子 (同 臨床検査科)

我々は膵性腹水症や胸水症には二峰性アルブミンが必発すると考えている。事実、過去6年間に経験した7例の全てにこの異常アルブミンを認めており、その診断にも有用である。ただ微量であるとデンストメトリーで二峰性とならないこともあるので、術語としては Bisalbumin の方がより適切である。今回は発見のされかたの典型例として、6例目を提示する。症例は59才男性で脳内出血と脳梗塞の既往がある。下痢が続く、呂律が回らなくなったため、脳外科に入院した。その後も続く下痢の精査のため、間もなく内科転科。その過程で膵炎および腹水と胸水が明らかとなった。血清、腹水、胸水の蛋白分画の全てに Bisalbumin が認められた。本症例は膵仮性のう胞破裂による膵性腹水と胸水の同時合併例として、外科的に治療し軽快した。